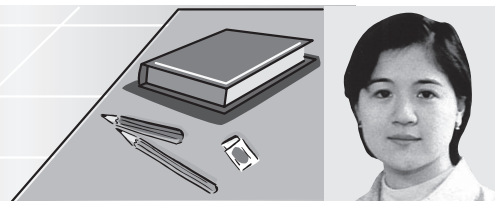


学生時代と図書館 89

—穏やかな午後と図書館—

坂口 昌子



わたしの通った大学は、山の中にありました。山を削ってつくられた大学ですから、通学で坂道を登らなければならないときや、夏のヤブ蚊の多いことには辟易していましたが、図書館からの眺めはとても気に入っていました。

図書館は、全館開架という恵まれた環境でした。まだ建て替えられたばかりで明るく、窓の多い図書館でした。

そして、ちょうど、私が調べ物で使わなくてはならない言語関連の書架の奥には、書架に隠れたような、窓際の机がありました。窓の外は、明るい光が差し込む森です。まるで、信州かどこかの別荘からの眺めと言ってもよいような（実際には大阪南部でしたけれど）景色が見える机を占有し、よく座り込んでいたものです。

小学生の頃から、わたしは、友だちとわいわいと校庭で遊ぶよりも、図書館の隅に自分の居場所を見つけ、「外で遊びましょう」と「今週の目標」を突きつける上級生の目から逃れるようにして、小説や物語の世界に逃避していたところがありました。

大学時代は、友人にも恵まれ、今までにない「自由」を味わっていましたが、友だちとおしゃべりしたり、大騒ぎしたりする楽しみも知りました。しかし、その喧噪から離れ、一人、書架の奥に逃げ込んで、木漏れ日を楽しみながら読書する時間は、それがレポートのための調べ物の時間だったとしても、とても幸せな時間でした。

特に、大学3年生から選んだゼミは「国語学」で、室町時代の古辞書をひっくり返すような作業が多かったため、自然と図書館にこもる時間も増えました。

結局はその道を選びませんでした。図書館司書の資格も在学中にとりました。友人の中には、図書館司書として今、市立図書館で働いて

いる人もいます。彼女も私も、図書館大好き！だったからです。

そんな大好きな図書館でしたので、修士課程に進み、別の大学院に行った後も、月に一度は母校の図書館に通っていました。幸いなことに、卒業生はすべて図書館利用証がもらえるという大学でしたので、恩師がこの大学を離れるまで、わたしはこの母校の図書館によく通ったものでした。

しかし、今では、図書館には文献を探しに行くことがめっきり減ってしまいました。参考図書は買ってしまふことが多いし、読みたい論文はネット上でほとんど読めるようになりました。そして、本を読むのは自宅か、研究室かになってしまい、図書館の窓際でということもなくなってしまいました。

自分の勉強では、図書館を使わなくなって久しいのですが、今は、娘を連れて、京都市立図書館を、右京、西京、洛西と、渡り歩いています。週末の1時間ほど、娘と本を選ぶ喜びをしみじみ感じています。

「ただで本、読み放題や、興奮するなあ」と言う私を、娘は「そんなに好きなん？」と笑いますが。

娘も小学校1年生になり、先週、初めて図書館の机に座って、イスを並べて読書を楽しみました。外には洛西の街路樹が、明るい夏の光を反射させています。

わたしは『かわいいタニク（多肉植物の本）』などという本を読み、娘は『もったいないばあさん』を読み、うーん、いいじゃないの、と、幸せをかみしめました。

わたしにとって、幸せと、本は、分かちがたく結びついています。

さかぐち まさこ（准教授・日本語学）